

## 相互行為と存在論の弁証法

### 在来知と近代科学を比較する共通地平をさぐるために

大村敬一

#### 1 これまでの概略（第1回と第2回の研究会）

##### 1-1 大分水嶺問題：在来知と近代科学を比較する際の諸問題

- (1) 「近代科学」(SEK) vs 「在来知」(TEK や IK) (レヴィ=ブリュール以来の人類学の根深い問題)
- (2) 両者の接触面での紛争 (e.g., 野生生物管理、環境開発の現場)
- (3) 競合する存在論：「近代科学か在来知か」
  - ※存在論：「世界はどのようになっているのか？」
- (4) 従来の人類学の基本姿勢：認識論による両者の違いの説明（これ自体は間違っていない）
  - ※認識論：「どうしてそうした存在論が生じるのか？」「どうやって世界を知るのか？」
  - ※両者の違いを認識論的パラダイム（認識の枠組み）の違いによる説明という短絡 (cf 大村 2013)
- (5) 人類学の陥穽：問題の所在
  - ・人類学の陥穽①：知識制作の過程における社会的実践の等閑視→原因と結果の取り違え (cf 大村 2013)
    - ※社会的実践によるパラダイム（文化）の生成過程の見落とし→パラダイム（文化）による認知の型どり
    - ※再帰循環的な過程：…→社会的実践→関係の構築→パラダイム→社会的実践→…
  - ・人類学の陥穽②：在来知と近代科学を単なる認識（世界の知り方、とらえ方）に限定してしまう。
    - ※実際には、在来知も近代科学も「世界を知りつつ世界を制作してゆく」社会的実践の過程だが、「世界を知る」側面にばかり焦点をあててしまう。
  - ・人類学の陥穽③：実践と観念の分離←陥穽①
    - ※社会的実践を軸に展開される再帰循環的な過程から知識とその背後にある存在論を切り離し固定化。
    - ※実際には社会的実践と観念（知識や存在論）と実在物は切り離せない（近藤第1発表）
      - 環境インフラストラクチャー、「非マルクス主義的唯物論」(STS)の探求から「観念=唯物論」の探求へ？
  - ・人類学の陥穽④：閉じた全一的な凍結したシステムとして在来知を把握←陥穽①
    - (1970年代の認識人類学批判以来の問題、ライティング・カルチャー、VDC流の全体化された存在論への森田の懸念)
    - ※存在論についても同じ：ある全一的な存在論が人びとの行為や知識の背後にあるという前提。
    - ※実際には、いくつかの相互に矛盾する局所的な存在論が状況に応じて使い分けられる。
      - e.g., 「ホッキョクグマは社会的な人物である」と「ホッキョクグマは動物である」
    - ※一貫した無矛盾の完全無欠な全体として知識や存在論が静的に描かれてしまい、例外や矛盾がネガティブに、あるいは境界領域としてしか扱われず、現実の場面では矛盾やジレンマこそが常態で一貫性や合理性はむしろ例外や言い訳でしかないという事実が見過ごされてしまう (cf レイヴ)。
    - ※同上の完全無欠なシステムには内部に動因がないので、システムの変動を説明しようとする、システムの外部のどこかに動因を探さねばならなくなる（近藤第1発表）。
      - 「主体」と「適応」の問題：これまでの人類学では、システムの動因については問わないか（静的な機能=構造主義）、システムを動かす動因が必要になると人間主体もしくは社会全体の環境適応が持ち出されるが、いずれも無理がある（人間主体でも環境適応でもシステム（社会）の変動を説明しきることはできない）。
    - ※本来であれば、人類個体、社会システム、環境などの参加要素（そのそれぞれが自律したシステム）がそれぞれ独自の運動を展開する際の相互干渉とカップリングのダイナミクスとして総合的に理解されねばならないはず（近藤第1発表）。→おそらく、これがエージェンシーやエージェントやアクタントの議論なのだろう。
  - ・人類学の陥穽⑤：「一つの自然」と「沢山の文化」の罫 (cf Ingold 2000; Nadasdy 2008)
    - ※学術的分業の前提：「自然」を明らかにする自然科学と「文化」を明らかにする人類学。
    - ※人類学は在来知の存在論を「真面目に取り上げて」(taking seriously) こなかった。
    - ※「真面目に取り上げる」=「真偽を保留し、どうしてそういう存在論が生じるのか、人びとの生きている現実（実践が展開される場）のなかで考える」≠「真に受ける」
    - ※結果的に、近代科学の一極支配に人類学は荷担してきた。

## 1-2 求められていること:在来知と近代科学の存在論を「真面目に取り上げる」(存在論の認識論的存在論的分析)

## (1) 世界を制作する実践への注目 (Molのpraxiography) ←人類学の陥穽①と②と③

※観念と実践と実在物の総合的理解:「知ること」と「考えること」と「行うこと」と「つくること」などを統合的に理解する必要性。

※世界が制作されつつ知識や存在論が生成する実践の再帰循環的な過程に注目。

世界:観念と実践と実在物の組織体

※「知識制作の実践」から「世界制作の実践」へ

## (2) 局所性への注目と視点の転換←人類学の陥穽①と②と③と④

※局所的な社会的実践の場への注目:存在論と知識を発生させつつ世界を制作してゆく社会的実践の過程に焦点をあてようとするならば、社会的実践が実際に展開される局所的な場に注目する必要(森田の提案、praxiography)。

※局所的な社会的実践:「潜勢力としての構造/出来事としての現実」が交互に明滅する離接的综合(切りつつ繋ぐこと)。(←森田発表と近藤第1発表)

\*社会的実践;「未分化な力」(潜勢力)にかたちを与える(現実化する)(森田発表)。

\*ただし、この前提にある「潜勢/現実」の二元論を反省する必要性(森田発表)。

\*むしろ、局所的な実践の場での「潜勢/現実」の二項対立の明滅の未決定性に注目?(→山崎発表)

(たしかに実践は潜勢力にかたちを与えて実在物を生み出すが、それで安定してしまうのではなく、潜勢力と実在物は絶えず交互に入れ替わり、)

※局所的な社会的実践の場から全体を想像する視点への転換→山崎発表(ゴシック的想像力)

※「全体を前提にした部分的分析」の機能=構造主義の還元主義から「諸断片の離接的综合による全体の生成」のポアジアンの全体論へ(万華鏡としての文化→レヴィ=ストロースの構造主義)

## (3) 未分化な力、未決定性、矛盾、ジレンマ、論理階型の混同、「構造/出来事」の弁別可能性の未決定性の積極的な評価:社会的実践を駆動する力(森田発表、近藤第1発表、大村第1発表)。

※局所的な社会的実践に常にすでに内在する「潜勢力としての構造/出来事としての現実」の未決定な矛盾の明滅こそが、局所的な社会的実践それ自体を駆動すると同時に、その実践によって断続的に生成する諸断片を結びつける社会的実践を駆動し、システムやネットワークを生成する。

## (4) 対称的な分析:在来知も近代科学も同じ分析の対象とする(ラトゥール)←人類学の陥穽⑤

※在来知の存在論についても近代科学の存在論についても、世界が制作されつつ知識や存在論が生成する過程に注目する。→「世界制作の機械」

※「事実(自然、近代科学)/解釈(文化、在来知)」の二元論(近代科学の一極支配の根源)から「実践によって制作された世界」の一元論(近代科学と在来知の対称的な分析)へ

※ただし、この対称性については、図式的にならないように注意する必要性(森田発表)。

→マイクロな局所的な社会的実践からマクロなシステムやネットワークが「世界制作の機械」として生成する過程に注目。

## (5) 要約:在来知と近代科学の存在論を「真面目に取り上げる」(存在論の認識論的存在論的分析)

※二つの存在論:①相手側の存在論(たとえば、先住民が世界をどう理解しているか)、②自己の存在論(たとえば、研究者が世界をどう理解しているか)。

※二つの認識論:①相手の認識論(たとえば、先住民はどのように世界を知り、そのメカニズム)、②自己の認識論(たとえば、研究者が先住民を含めて世界をどのように知り、そのメカニズム)。

\*存在論的転回は、広い意味での認識論②に拘泥していたポスト・モダン人類学から離脱し、存在論②に転回すべきであるという主張のことを指しているのかもしれない。

※存在論的な認識論:存在論①の認識論①のメカニズムを存在論②で明らかにする(先住民の存在論のみならず、テクノサイエンスの存在論の認識論的なメカニズムを存在論的に明らかにする)。

「真面目」は、自己の存在論(たとえば近代のテクノサイエンスの存在論)を基準に、「非合理的」とあるとか、「擬人化」や「比喩」とあるとか、先住民の存在論を勝手に判断することでないのはもちろん、その存在論を掛け値なしに「真」とあるともせず、先住民の存在論がどのようなシステムによってどのように生じてくるのか、その存在論の認識論的なメカニズムを存在論的に明らかにすることである。もちろん、「真面目に取り上げる」べきなのは、先住民の存在論だけではない。ラトゥールを嚆矢とする科学人類学がそうしているように、近代のテクノサイエンスの存在論も「真に受ける」のではなく、「真面目に取り上げる」ことで、その認識論的なメカニズムを存在論的に明らかにせねばならない。

- (6) 在来知と近代科学の離接的綜合（自律しつつ接続する）の可能性と限界の探究（本プロジェクトの具体的な目標）
- ※「近代科学が在来知か」から「近代科学も在来知も」へ
  - ※在来知と近代科学がマイクロな局所的社会的実践から「世界生成の機械」として組み立てられるメカニズムをプラクシオグラフィカルに明らかにすることで、両者の違いが生成する過程を明らかにするとともに、その過程のなかに両者を架橋する可能性と限界をさぐる。

## 2 問題提起：在来知と近代科学を比較する共通の地平としての「ムンディ・マキーナ」（世界制作の機械）

※ここから先はアイデア・スケッチ（叩き台）です。間違いの指摘を含め、忌憚のないご意見をお願いします。

### 2-1 ムンディ・マキーナの構成

- (1) 要素（モノド）：「局所的な社会的実践」（関係の生成、行為）と「潜勢力としての構造」（存在論、理念）と「現実としての出来事」（相互行為、実在）の弁証法的関係（相互に相互を構成し合う関係）。

※マイクロな振動的性格：局所的な社会的実践のたびごとに「潜勢力としての構造」から「現実としての出来事」が生じつつ、その出来事が社会的実践によってのみ生じうるといふ儂い性格の故に、さらなる社会的実践を要請しつつ、その社会的実践がなければ消滅し、その社会的実践が成されれば再度生じるといふ明滅を繰り返す。

※不安定性：このモノド自体は局所的な社会的実践によってのみ一回的に局所的に生成するにすぎないので、きわめて不安定で儂い（量子的な振る舞い?）。

※内在的な駆動力；この不安定性のゆえに、それ自体の生成が駆動されるとともに、他のモノドとのつながりを要請する。

※事例：コミュニケーションの場合

コミュニケーションとして成立する相互行為には「相手は社会的人物である」という存在論が伴う。この存在論とコミュニケーションという相互行為の型は、そのような存在論があるならば、そのように振る舞わねばならず、そのように振る舞うということは、そのように相手をとらえる存在論が立ち上がるというかたちで、相互に相互を循環的に規定する弁証法的関係にある。

\*コミュニケーション：「社会性はコミュニケーションの行為から成り立っており、そのコミュニケーションの行為では、私は他者になり変わり、その際に他者も私になり変わる人物として理解されるが、この事実を私も他者も理解している」（Schutz 1970: 163）。

- (2) 要素（モノド）を離接的に綜合して組織化する「媒介された相互行為」（この一部が知識と技術の共有プロセスということになる）：二項間の相互行為ではなく、媒介項を介した三項間の相互行為で『道具媒介的な相互行為』と言ってもよい。

※さまざまな媒介項（刻印と言ってもいい?：この一部が知識と技術の共有モードということになる）

- ①他者（身体や語り）。
- ②文書。
- ③数値および幾何学的な図像。
- ④その他、いろいろあるだろう。

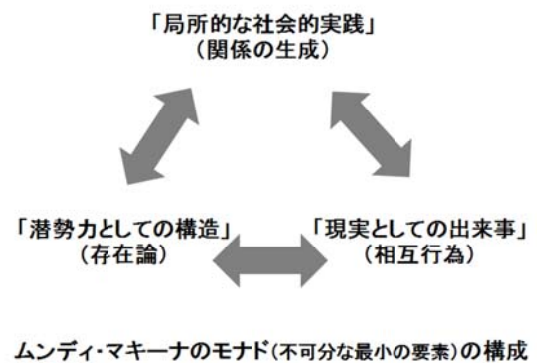
※「媒介された相互行為」の駆動力：「媒介された相互行為」（道具媒介的な相互行為）は、モノドに本質的に内在する不安定性によって駆動される。

- (3) ムンディ・マキーナの駆動力：「媒介された相互行為」による要素（モノド）の離接的綜合に本質的に内在する無理もしくは矛盾。

※要素（モノド）はその本質的な不安定性の故に「媒介された相互行為」を要請するが、どのモノドとどのモノドと離接的に綜合するかに必然性はなく、むしろ無理なものを無理矢理繋いでいるという感じなので、そもそも離接的綜合それ自体に矛盾がはらまれている。

※この矛盾を駆動力にムンディ・マキーナはシステムやネットワークとして動的に組織化されるが、そもそも、その離接的綜合自体に無理や矛盾があるために、ともかく繋ぐことで維持しなくてはならず、自転車操業になる。

→テクノサイエンス・ネットワークの無限拡張性、イヌイトの生業システムのオートポイエティックな性質。



## 2-2 自転車操業としてのムンディ・マキーナの事例：イヌイトの生業システム

### →配布の「青色本」草稿

※イヌイトのムンディ・マキーナの基本構成：イヌイトの知識の存在論は、イヌイトが恣意的に世界をそのように認識しているから生じるわけではない。それぞれの存在論を伴う二つの相互行為、すなわち、①イヌイト同士の分かち合いの相互行為（「相手は信頼すべき社会的人物である」という存在論を伴う）、②動物との〔誘惑／贈与〕の相互行為（「相手は誘惑して贈与してもらう社会的人物である」という存在論を伴う）が、次のように相互に相互を必然化する弁証法的関係のかたちで接続され、生業システム全体が編成される過程の必然的な帰結として立ち上がってくる。

まず、イヌイトは信頼し合うべき社会的人物であるという存在論がイヌイトの間に食べものの分かち合いの相互行為を要請し、その分かち合いの規範化のために、動物がイヌイトよりも優位にある社会的な人物であるという存在論が要請される。そして、その存在論が誘惑の技術としての生業技術で動物に働きかけるという振る舞いを要請し、その振る舞いによって動物との相互行為が〔誘惑／贈与〕に固定化される。さらに、その相互行為の固定化によって、イヌイトの分かち合いの相互行為が生業システムの成り立ちの必要条件として要請され、その相互行為の実践によって、イヌイトは信頼し合うべき社会的人物であるという存在論が立ち上がり、はじめに戻って論理的な必然性の環が閉じる。

※イヌイトのムンディ・マキーナにおける離接的綜合の恣意性（無根拠性）の故の必然化：イヌイトと動物の関係の再生産が不確実なものに固定されたうえで、食べものの分かち合いを媒介に、イヌイト同士の信頼の関係が動物との〔誘惑／贈与〕の関係に循環的な因果関係として、つまり、①イヌイト同士の信頼関係をもたらす食べものの分かち合いが、動物との〔誘惑／贈与〕の関係を生み出し、②動物との〔誘惑／贈与〕の関係が、イヌイト同士の信頼関係をもたらす食べものの分かち合いを生み出すというかたちで恣意的に接続されてしまうと、イヌイトはどうしても食べものを分かち合わねばならない状況に追い込まれてしまう。この接続では、動物との関係の再生産が不確実になっているため、①の成立が不確実になり、そのうえ、イヌイトが食べものを分かち合うことが、この二つの関係の循環的な接続の最低限の必要条件になっているため、この接続を維持して食べものを手に入れようとするならば、その必要条件の帰結がどんなに不確かであっても、その必要条件を満たす、つまり、分かち合わねばならなくなっているからである。こうして、食べものを入手したければ、その必要条件の分かち合いを実行する他に選択肢はなくなり、かくして分かち合いが規範化される。